学びや タイムスリップ

歴史人物 自然と理解

京都の小学校は全国に類を見ないほど多くの美術品を所蔵しています。優れた絵画などで学びやを立派に飾るという趣向は、近代の京都人がいかに教育を大事に考えていたかを物語っています。

校舎を対外的に豪壮に見せるだけではなく、一流の美術を子どもたちの身近に置いて文化を自然に学ばせる効果も持っていました。

画家たちや地元の所蔵家も、学びのためならと作品の寄贈を惜しまず、明治から現代にかけて学校美術品の一大コレクションが形成されたのです。

ありし日の学びやの豪壮さを特に想像させるのは、学校に残された屏風の数々です。明治・大正時代の木造校舎では、立派な屏風が家具として間仕切などに使われていました。

そうした中から、今回は上京区の聚楽小（現在は西陣中央小に統合）に所蔵されていた、6曲1双の「和漢故事人物図」屏風を紹介します（写真①）。

屏風の1扇ずつ、12の画面にそれぞれ6面ずつ日本と中国の歴史人物が描かれており、中国の人物では蜀の諸葛亮孔明や前漢の李広将軍など、日本は源義家、楠木正成などが登場します。これらの画題として多く選ばれたのは、明治時代に修身や歴史の授業でも学ぶ人物たちでした。

作者は明治時代の京都画壇を代表する画家、今尾景年と鈴木松年です。鈴木派の同門であった2人が合作し、景年が日本を、松年が中国を担当しています。勢いのある筆致で、表情やしぐさが実に生き生きと表現されており、子どもにとっても歴史人物の理解にとても役立つものだったのでしょう。本作は聚楽小の集会室に飾られ、長年親しまれました（写真②）。

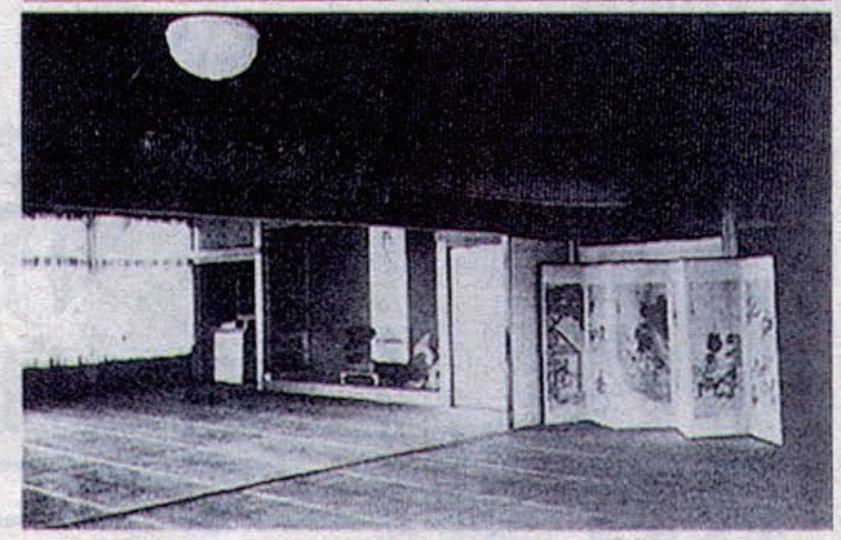
昭和時代になり、校舎が鉄筋に改築されると、屏風の作品は飾られる場所を失い、学校の倉庫にひっそりと保管されるようになりました。しかし、長い間子どもに愛された作品の存在は学校や学区で語り伝えられ、これまで残ってきました。そして、現在は学校歴史博物館の収蔵品となり、来館者に学びを与え続けています。

（京都市学校歴史博物館 学芸員 森光彦）

◇

今回紹介した「和漢故事人物図」屏風の一部を4月1日から5月5日まで、学校歴史博物館（下京区）の常設展で展示します。

写真①、今尾景年・鈴木松年「和漢故事人物図」のうち、「諸葛孔明」（右）と「源義家」＝江戸時代後期～明治時代、元聚楽小蔵



写真②、聚楽小の集会室。右側に和漢故事人物図屏風が見える（1928年）